年間選者賞（令和元年七月号〜令和二年六月号）

伊藤一彦選

# 帖佐光浩（令和二年四月号）

カシミヤの毛布は眠る　夕暮れにしずむ私の風邪を抱いて

なけなしの喉の潤い吸い取ってぎいかかかかと唸るエアコン

関節が静かに錆びてゆくだろうごっとり唐揚げだけの弁当

黒々と油汚れに身を包むガスコンロとは年を越せない

サッポロ一番味噌ラーメンの三分の余生に蓋をして生きる夜

ぱらぱらと肩に降りつむ雪のつぷ煌めくぱかり夜行パスゆく

**●作者の言葉**

九州の果てから関西へ進学してはや一年、輝く大学生像は既に幻となりつつある。設計実習に追われて昼夜逆転、食生活はボロボロ、掃除や洗い物は溜め込みがち。休日も殆ど遠出せず、下宿の周辺でじめじめと過ごしている。くだらない生活だが、案外新たな発見もある。街に転がるさまざまな瞬間が、相対的に鮮やかに浮び上がり、胸に迫ってくる。入会して間もなくありがたい賞に与り、とても嬉しく思います。今後も心の花の懐の深さに甘えて、手のひらに感受した細やかなものごとを表現していく所存です。

**●選者の言葉**

特選作品を中心に読み返し、ベテランの幾人かを候補に入れて考えたが、最終的には若い帖佐光浩君の作品を年間選者賞に推すことにした。発想が新鮮でユニーク、そして説得力がある。

一首目の「毛布」の擬人化、二首目の「ぎいかかかか」と三首目の「ごっとり」のオノマトペ、四首目の「ガスコンロ」の擬人化、六首目の「パ」「プ」のパ行音の遊び。五首目については幸綱氏が「今月の十五首」に取り上げ、「カップラーメンを題材にしつつ、「三分の余生」という八音を入れることで、一気にユーモアの歌として展開させた気合いに感心した。なかなか切れ味のいい感覚と思う」と評している。今後に大いに期待する作者である。